

巻頭言 人新世の姿形寡聞

黍稷農季人

Preface: A little knowledge on figure of the Anthropocene

Kibikibi Nokijin

ホモ・サピエンスは本来獰猛で強欲な動物なのだろうか。この特性を穏やかにして社会生活を安寧に営めるようになるには、個人が心の構造と機能とを発達させねばならない。種集団内に毒をもった個体から善意の個体まで、とても著しい多様性がある。この多様な変異性は生物学的進化に関わる天性の遺伝的なもの gene に、文化的進化に関わる社会性の文化的なもの meme が加わっている、著しく複雑である。

現代都市民は、自然、生業、生活から離れて、知能を衰微させ、教養を喪失しているのである。知能は体験的に発達するもので、多量の情報を暗記することではなく、学校教育履歴では発達は望めず、個人学習履歴をこそ蓄積することだ。いわゆる学歴が高くても、直接体験で学ばない人は知能が未発達と言うことになる。自然から遠ざかるにつれて五感は無磨かれずに弱まり、博物的知能は発育せず、生業をしなくなれば、技術的知能も発育せず、生活の中身が薄くなれば、社会的知能もやはり発育しない。さらに、過剰に便利な機器に依存すれば、技術的知能も社会的知能も衰えるばかりだ。その上、言語知能を外付け情報機器に過剰依存して、仮想化を強めれば、現実言語（知能）も弱くなり、一般知能も委縮して、第6感（直感、直観、言い換えれば想像、ファンタジー）も機能せずに、ついに教養は未熟なままで、第7感（良心）は発育しないままになる。すなわち、人間は平時にはか弱い自己家畜へと退行進化しているが、戦時は窮鼠猫を噛むように、追い詰められると反転して牙をむきだし、獰猛な動物に化ける。

動物の生活は他の生物の命を奪う捕食に

よって賄われる。人間として同じことで、本来は自分の食べ物は自分で捕食する、他種の命をいただくことが基本原則で、生業は原則に従う営みだ。しかし、単なる消費者になった現代都市民には忘れ去られたが、この鉄則はなくなったわけではない。平時には物価の値上がりで大騒ぎする程度であるが、災害時や戦時には飢饉が起り、食料生産の不足、買い占め、隠匿、などにより、飢餓が拡大して、莫大な死者が出る。これは現在も起っていることで、いつどこで生まれるかによって程度の差はあるが、個人の人生で一度は経験しうることだ。

したがって、食料は家族のためにいくらかの常時備蓄が必要である。家庭菜園も、たとえベランダでのプランタ程度でも、少しでも自給知足で、素のままの美しい暮らしを勧めたい。自治体や国レベルでの食料の備蓄、さらには農業生産の維持促進、食料の安全保障を自治体や国の責務として憲法で保障することが必要だ。戦争は食料生産との関わりで起こる。日本が満州を侵略したのは、狭隘な農地しか有しないのに、農村人口が過剰となった事にもよる。満州に農民はいたのに、彼等の土地を奪うように、満蒙開拓団を送り込んだ。ソビエト連邦がウクライナでしたホロドモールもイスラエルがパレスティナで行っていることも、その事例だ。この人新世においても、また百年前と同じようなことが繰り返し、ウクライナで起きている。火の七日間（風の谷のナウシカ）が来ないように、抗い、願い、祈り、個人として為すべきことをしておきたい。素のままの美しい暮らしで、誰もが幸せになって良いのだ。